

ハモ *Muraenesox cinereus*

ハモは自身のおいしい魚ですが、非常に小骨が多いことから、「骨切り」と呼ばれる、皮を切らずに身と小骨だけを細かく切る処理を施します。骨切りをしたハモの身は、湯引きになどにして食べます。また、骨切りをしない場合は、かまぼこなど練り物の原料に利用されます。ハモは特に京都で珍重され、祇園祭の時には高値で取引されます。

近縁にスズハモという大型になる種があり、ハモ漁で混獲されますが、目の後ろにある骨のふくらみがないこと、肛門までの側線孔数が少ないこと（スズハモ：39以下、ハモ：40以上）、脊椎骨数が少ないこと（スズハモ：126～138、ハモ：146～157）で区別されます。

生物特性

ハモは細長く、死後硬直すると全長が測定しにくい場合があるため、肛門よりも前の長さを肛門前長（以下、PL）と呼び、大きさの指標にします。ハモの全長と体重の関係は、全長 50～60cm（PL20～23cm）が 150～200g、全長 70cm（PL29cm）が 400g、全長 80cm（PL34cm）が 800g で、主に漁獲されているハモで大きな個体は PL50cm、体重 2～3kg になります。

成長は雄雌で異なり、雌の方が大きくなります。雄の成長は、2歳が PL12cm、4歳が PL23cm、6～7歳が PL30cm です（図2）。雌は、2歳が PL12cm で雄とほぼ同じですが、3歳で PL20cm、4歳で PL30cm、6歳で PL40cm となり、体重が 2kg を超える PL50cm の個体は 10歳以上と考えられ

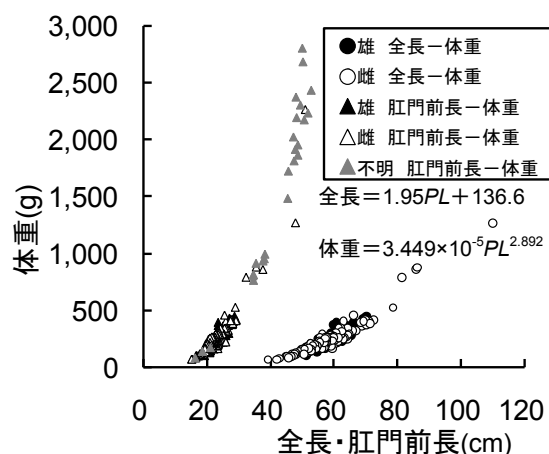


図1 高知県産ハモの体重と全長・肛門前長の関係（平成18～20年）。

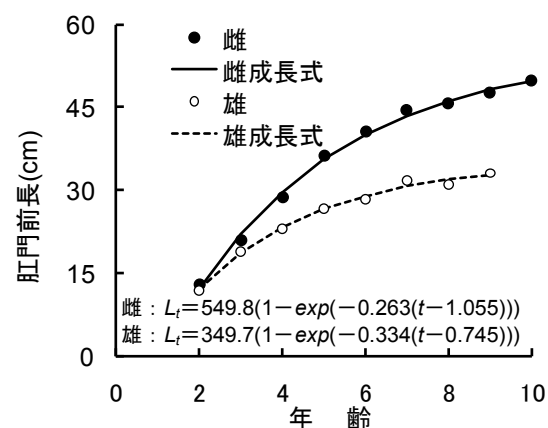


図2 高知県産ハモの年齢と大きさ（肛門前長）の関係。

ます。

高知県産ハモの産卵期については十分なデータが蓄積されていませんが、断片的な調査結果や徳島県の詳しい調査から、夏期の7～9月と考えられます。

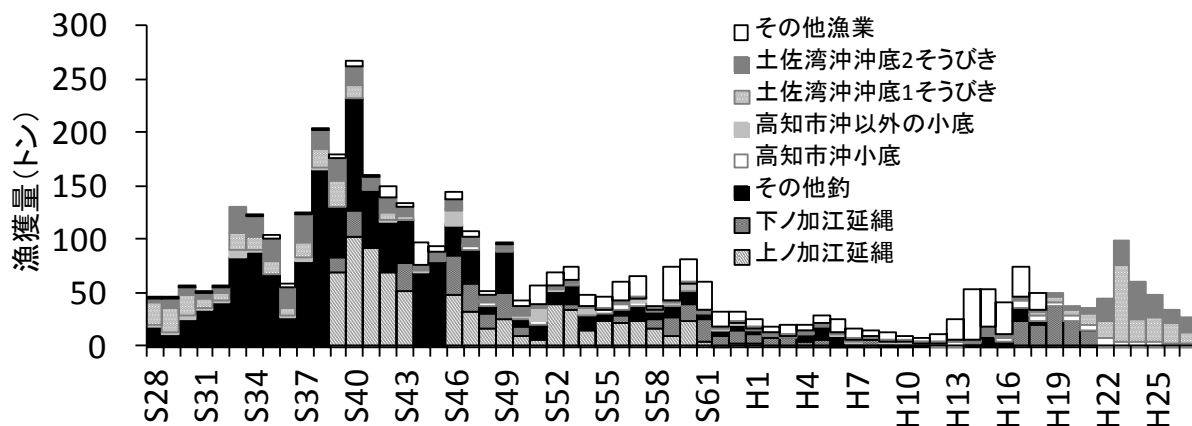


図3 高知県におけるハモ漁獲量の推移（昭和28～平成27年）。

資源動向

高知県下のハモ漁獲量は昭和40年（1965年）に267トンでピークを迎えた後、大きく減少し、平成11年（1999年）には7トンと昭和40年（1965年）の約3%まで落ち込みました。しかし、平成14年（2002年）以降、ハモ漁獲量は回復傾向を見せ、最近では50トン前後が水揚げされています。

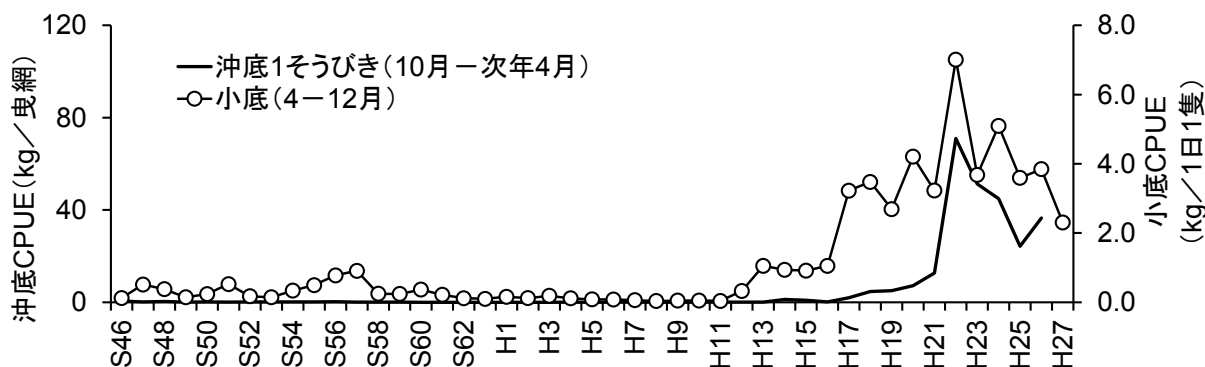


図4 高知市沖小型底びき網と沖合底びき網によるハモの漁獲効率（CPUE）の推移（昭和46～平成27年）。

底びき網漁業によるハモの漁獲効率（CPUE）は近年増加しました（図4）。他県でも漁獲量が増加したことから、ハモ資源の増加によると考えられます。しかし、平成22年以降、ハモの漁獲効率は減少傾向にあり、高知県におけるハモ資源の水準は「中位」、動向は「減少」傾向にあると考えられます。

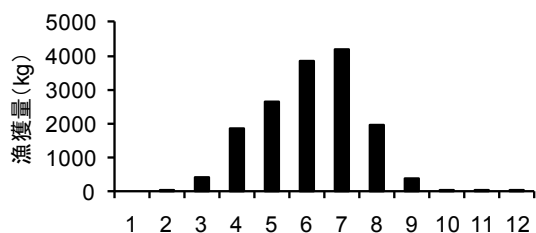


図5 下ノ加江の延縄による月別平均漁獲量 (平成15～22年).

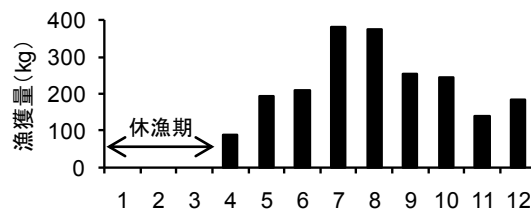


図6 高知市沖小型底びき網による月別平均漁獲量 (昭和47～平成22年：中央水研の調査による).

県内の漁獲動向

高知県のハモ漁業は延縄を含む釣と小型底びき網が主体です。延縄は上ノ加江、久礼、下ノ加江が有名で、小型底びき網は高知市（御壺瀬・浦戸）、須崎市、黒潮町（佐賀、入野）沖に漁場があります。

ハモの漁期は延縄が4～8月（図5）、小型底びき網漁業は休漁期（高知市沖小型底びき網は1～3月、図6）以外のすべての月ですが、主漁期は夏です。これは、夏が産卵期であることに加えて、夏に関西での需要が増加し、単価が上昇することと大きく関係しています。

高知市沖小型底びき網のハモ漁場は水深50～70mで主に夏に形成されますが、沖合底びき網（1そうびき）は主漁場が水深120m以深で、水揚げは10月と翌年の1月に多くなります。また、図4で高知市沖小型底びき網と沖合底びき網（1そうびき）の漁獲効率の増減はよく合っています。これらから、産卵期に浅場にいたハモが多い年は、産卵が終わった秋以降に深場で多く漁獲されていることがわかります。徳島県ではハモは越冬し、冬は低い水温を避け瀬戸内海沿岸～紀伊水道外域の深場に移動するといわれています（多々良 1953、岡崎 2014）。高知県でもハモは冬に深場で越冬しているのかもしれませんが。